

張風雷氏の発表論文に対するコメント

崔箕杓* (韓国 金剛大学校)

仏教の教学の中で、「すべての衆生に仏性がある（一切衆生悉有仏性）」という思想は、仏性という概念の理解が極めて困難ではあっても重要な意味を持っている。ブッダの一切智、すなわち神だけの領域と考えられた全知（omniscience）の能力を得ることのできる根拠がここに準備されただけでなく、この根拠が、地を這い回る虫たちを含め、識を持つ一切の衆生に普遍的に適用されるという画期的な意味を備えているからである。『涅槃経』が翻訳されて以降、「仏性論は南北朝時代の各学派が注目する中心的な問題となったが、隋唐佛教においては、それだけでなく、諸宗派の教理の主要な部分を占めるようになった」という発表者の指摘は、この重要性和関連するものである。

『法華経』には「仏性」という用語は一度も出てこないが、「すべての衆生が成仏できる」ということは、「一大事因縁」と「会三歸一」を通して既に十分に解明されていた。天台大師は、このような『法華経』の記述と、『涅槃経』で明かされた「仏性」の概念を総合して三因仏性論、十界互具、性具善悪説などの独特かつ緻密な学説を展開した。これまで韓国の研究者たちは、これらのテーマのそれぞれについて梗概を明らかにし、哲学的、倫理的な意味など、様々な観点から分析を行ってきた。

仏性論という点では、2010年に発表された「天台智顛の仏性論」という論文があるが、これは三因仏性論のみに焦点を当てたものであった。また評者も、「十界互具の思想は「悉有仏性」と「普門示現」とを可能にする具体的な論理」であると指摘したことがあるが（「天台の一念三千説の研究」**）、天台大師の仏性論を総合的に考察した事例はなかったように思われる。それゆえ、三因仏性、五仏性、三軌、性具善悪な

*최기표 (チェ・ギピョ)。金剛大学校仏教学部教授。

** 「天台 ‘一念三千説’ 의 研究 」(東国大学校博士論文、1996)。

どを一つに体系化し、天台大師の仏性論を幅広く考察した本論文には画期的な意義があると見ることができる。

本発表は、智顛の生没年代などの点で、評者にとって啓発される点の多いものであった。ただ、次に掲げるいくつかの点については、口頭の説明、あるいは雑誌論文等によって補足説明をしていただければ、他の研究者たちにとって裨益する点が多いであろう。

まず第一に、冒頭で「ある仏教学者は、仏性を果として、他の仏教学者は仏性を因として解釈……」と言い、仏性について始有説と本有説があると述べておられるが、これらを代表する学者がいかなる人々なのかについて簡単に説明していただけると、思想的な面で益するところが多いと思う。

第二に、『観音玄義』を引用する注釈（注 11）の本文には、『涅槃經』に「非因非果を仏性という」と言うのは、……また、「是因非果を仏性という」と言うのは、……また「是果非因を仏性という」と言うのは」とある。『涅槃經』にはこれと正確に一致する文章は見出せないが、天台大師はこれによって何を表現しようとしたのかを明らかにしてもらえると助かる。

第三に、発表者は注 3 に該当する本文で、「智顛は『法華經』が仏出世の本懐を説いたところに諸經に勝る重要な意義があると考えた」と述べているが、これには明確な根拠があるのであろうか？

智顛は『法華經』が「妙である」とは述べているが、「他經に勝る」とは言っていない。また「仏の出世の本懐を説く唯一の「純円」の教え」であるために『法華經』が他經に勝っているとも述べてはいない。「円教」とは、「円妙」「円満」「円足」「円頓」というように、「欠けることがなく、すべてを備えた」という意味である。出世の本懐を明かすということは、究極の目的まで明らかにしようとしたということであり、円教の一つの特徴に過ぎない。

また、智顛を「法華經至上主義者」とあるとか、「円教至上主義者」とあるとか評するのは、『法華經』と天台教判の真意を誤解したためではないかと評者は考える。

声聞乗と縁覚乗は「方便」であり、これらはすべて一仏乗であるという『法華經』

の言明は、すべての教えが成仏の道に通ずる、つまり、意味あるものであることを明かすものであり、天台大師の藏・通・別・円の化法四教判は、様々な教法がそれなりに価値と効能とを持つことを明かすところに本意が存するのである。円教が最高で、残りは低劣なものだというわけでないのは、総合栄養剤が最高で、ビタミン剤、カルシウム剤などが低劣なものでないのと同様である。

(翻訳担当：佐藤厚)